

ひどころ 尖刃 変われば、鍋・釜も変わる

- 栃木県内の発掘調査からみた煮炊きの変遷 -

期間：平成23年7月30日～10月7日

場所：栃木県庁本館2階県民プラザ前
ガラスショーケース

炉の時代（縄文時代～古墳時代前半）

縄文時代（12,000年前）から古墳時代の中ごろ（1,550年前）まで、竪穴住居の形は変わっても、そのほぼ中心に炉が設けられます。

狩猟採集民の縄文時代の土鍋（縄文土器）は、口が広がるバケツ形の深鉢が多く、稲作農耕民の弥生時代になると、土鍋（弥生土器）は木の蓋をのせるために、口が「く」の字に折れる甕形となります。さらに、古墳時代には胴部が球形になり、器壁を削って薄く仕上げ、文様は全く施されなくなります。

なお、古墳時代の初め（1,700年前）には、東海地方から南関東地方で盛んに使われた熱効率の良い台付き甕が、県南部でしばしば出土します。



縄文土器（深鉢）

縄文時代



縄文時代の竪穴住居跡



煮炊きの様子



縄文土器（深鉢）



石囲い炉



埋甕炉



複式炉

いろいろな炉



弥生土器（甕）

古墳時代前半



古墳時代前半の竪穴住居跡

弥生時代



台付き甕

甕

カマドの時代（古墳時代後半～平安時代）

カマドは、竪穴住居の壁に造り付けられたドーム状の調理専用施設で、朝鮮半島から伝来したと考えられています。土器の底を地面から浮かすことによって、熱効率が大幅に良くなり、調理時間の短縮にもつながることから、古墳時代の中ごろには、全国に普及します。

煮炊き用の甕は、カマドの土で固定されるため胴部が長くなり、底のあいた甕＝甗が出土することから、“煮る”以外に“蒸す”という新たな調理法が加わったことがわかります。

平安時代（1,100年前）になると、県の東部・西部・北部で地域性を持った甕が生産・流通していました。また、この頃に羽釜が登場します。

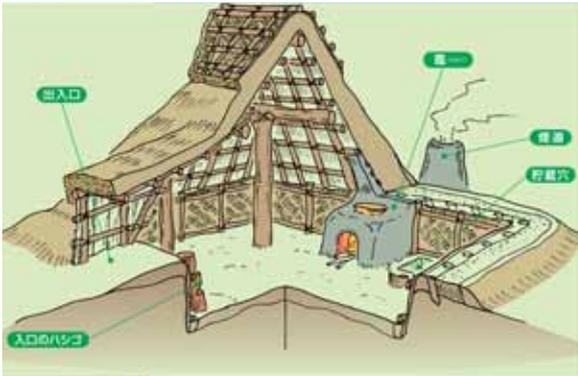
古墳時代後半



甕

甗（こしき）

平安時代



カマドをもつ竪穴住居の模式図



地域性のある甕



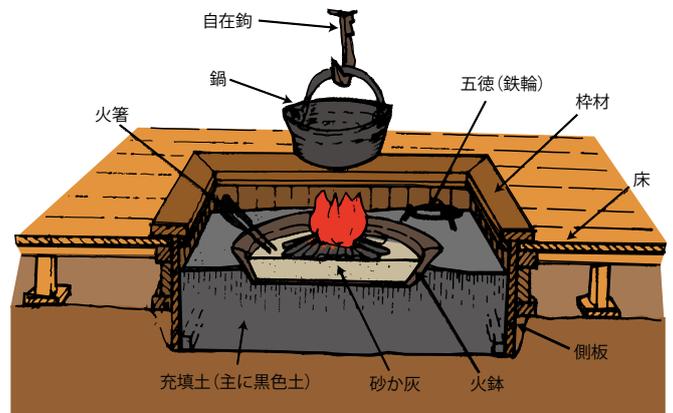
羽釜

囲炉裏の時代（鎌倉時代～江戸時代）

平安時代後半になると、住居は竪穴式から掘立柱の建物に移行します。同時に東国ではカマドの発見例は皆無に等しくなり、武家や農家の屋敷には、調理を目的としたカマドとは別に、囲炉裏が設けられるようになります。

囲炉裏での煮炊きは、西国では五徳（金輪）に鍋を置いて火にかけるのに対し、東国では天井からぶら下がった自在鉤に鍋を吊していました。

栃木県では、室町時代になって、鉄鍋を模倣する形で出現した土製内耳鍋が普及します。内耳鍋は、熱効率を上げるため底が広く、火に掛け吊す際に弦が焼けないように内側に耳が付けられています。鉄鍋も、相当普及していたと考えられますが、武器などに鋳直されることが多かったため、出土例は多くありません。



囲炉裏の模式図

室町時代



内耳鍋

江戸時代



鉄鍋

近代・現代



釜（アルミ製）



ガス炊飯器とアルミ鍋



ホーロー鍋



電子炊飯器

(財)とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター
〒329-0418
栃木県下野市紫474番地
TEL 0285-44-8441